細割之日乾、至同十六日晩、各擕此薪登山上、山西北面有大之字跡、是弘法大師之所畫也、所々以小石爲徵、各合而視之、則字畫分明也、凡大一字、横一畫、其長及四十間、其間炬火十箇餘也、左竪一畫八十間餘、其間炬火二十箇、右一畫六十八間、其際炬火二十九箇餘也、所擕來之薪木積置前、所謂所爲徵之小石上、同時點火、其光分明赫奕、是謂亡魂送火、洛人爭觀之、凡兩村民家、割此木爲炬、其數四百餘、分之各主、或三四、或五六、爭競而點火、始此薪日乾間、誤用他事、則其家必有祟云、是弘法餘威之所及者乎、不如此、則何至今日有不易之理乎、此外北山點妙字法字、或有作船形者、又所々山岳或原野、諸人以枯麻條爲炬、點火拋虛空、或燒平地、俗是亦謂聖靈送火、又稱施火燒、凡盂蘭盆會所供佛之餘物、悉擕出燒之、諸人群集鴨川邊觀之、

〔花洛名勝圖會四〕如意嶽○中略　毎年七月十六日の夕方、京師の山にて送火を燒事數あり、就中此山の大文字の形勢適壯、その地尤高嶽にありて、連珠の如く粲然として明かに、赫然として赤し、他の火に比ぶれば大に勝れり、土人傳ていふ、往昔此麓に、淨土寺といへる天台の伽藍あり、本尊阿彌陀佛、一とせ回祿の時、此峯に飛去り、光明を放ち給ふ、是を慕ふて、本尊を元の地へ安置し、夫より盂蘭盆會に、光明のかたちを作り火を燈しける、爾後弘法大師、大文字に改め給ふ、星霜累りて文字の跡も壓れしかば、慈照院義政公、相國寺の横川和尚に命せられ、元の如くに作らしめ給ふと云、山州名跡志云、相國寺横川和尚と、將軍の臣芳賀掃部と、兩人作る所也、掃部は和尚筆道の弟子なり、火の數七十二ありと云々、

〔續史愚抄東山〕元祿二年七年十八日壬子、今夕有諸山送火、去十六日依雨不燃

〔增補江戸年中行事七月〕十六日　諸所ゐんま參り、正月に同じ、

〔東都歳事記三月〕十六日　閻魔參、ゐんまの齋日と云　參詣の場所、正月十六日のくだりに記する如し、東叡山、輪藏も啓らく　增上寺、淺草寺、山門を開き、諸人登樓をゆるす、

〔東都歳事記一月〕十六日　閻魔參、世にゐんまの齋日といふ　淺草御藏前長延寺、閻魔丈六俱生神脫衣婆立象　同大圓寺、十

閻魔詣